

DXに懸ける

〈78〉

「業務のDX(デジタルトランスフォーメーション)化によるスマート介護は、施設や職員だけではなく、利用する高齢者にもメリットが大きい」と話す。

リハビリでは、2021年に導入した動画解析アプリが効果を発揮している。歩行のリハビリに取り組む利用者をタブレット

介護老人保健施設「フルリールむかわ」(北杜市)は入所者のリハビリテーションに人工知能(AI)を活用した解析アプリを導入し、介護サービスの質の向上を図る。施設を運営するフルリールグループの中込敏代表は

フルリールむかわ

動画解析でリハビリ促進



歩行アシストロボットを使ってリハビリする高齢者を見守るスタッフ(左)
＝北杜市武川町柳沢

【所在地】北杜市武川町柳沢740の1

【代表者】中込敏

【DXの歩み】2019年に歩行アシストロボット、21年に動画解析システム、24年に見守りセンサーを本格導入。25年にカルテ音声入力システムを運用開始。

ト端末で動画撮影し、歩く速さやふらつき、リズム、左右のバランスの4項目をAIで分析し、点数化する。定期的に撮影することで、改善状況を確認できている。自主的にトレーニング

4項目の点数を利用者本人に見せることで、リハビリへのモチベーションの向上につながっている。自主的にトレーニング

する姿も見られるようになった。理学療法士として施設に勤務する大西健太さんは「解析アプリの手助けがあるおかげで、ベテランスタッフ頼りにならず、新人理学療法士が早期に独立して指導することが可能になった」と説明する。

19年からは、歩行が難しい人の股関節に装着するアシストロボットも利用。器具を装着した人が1歩目を踏み出す力や速度などの情報を、タブレット端末

にリアルタイムで表示する。端末に波形で表示される歩行状態をチェック。スタッフが利用者組んでいる」(大西さん)といふ。

利用者のカルテ制作では、25年からスマートフォンアプリによる音声入力方式を採用することで省力化している。制作時間が大幅に短縮されたことで、リハビリの時間を延長。導入前は書類作成の時間を確保するため、リハビリを午後2〜3時ごろに終える必要があったが、導入によって午後5時ごろまで延びた。カルテは施設のスタッフ間で共有管理している。

業務効率化で、受け入れ人数も増やしている。10年ほど前は約20人だったが、現在は40人に倍増した。「効果的なリハビリサービスを提供できるようになったことで、利用者の機能回復も進んでいる。以前は施設に

入所しなければならなかった人でも、在宅でリハビリに取り組んでいる」(大西さん)といふ。

24年4月からは、入居者のベッドからの転落やスタッフのアシストがない状態で歩いて転倒する事故を防ぐ見守りセンサーを本格稼働。全90床に備えたカメラとセンサーが捉えた入居者の動きをAIが判断し、異常があればスタッフに通知する。導入以降は転倒などの事故の発生件数が大幅にペースダウン。件数は、3分の1程度に抑えられている。

中込代表は業務のDX化について「利用者サービスの質の向上や職員の労働環境改善などの観点で利点が多い」と話す。人材確保についても「働きながら技術や知識を吸収したい若者は少なくない。介護現場の人手不足解消にも寄与するのではないか」と話している。(三枝大悟) 2次回は1月20日に掲載します